

生成 AI を活用したアクティブ・ラーニングに関する実践研究

～ ChatGPT 等及びスライド作成 AI 「Gamma」を活用して ～

Practical research on active learning utilizing the generated AI

～ Utilizing “ChatGPT” and the slide creation AI “Gamma” ～

法政大学 兼任講師 田神 仁

0 概要

生成 AI（以下、AI と標記する）である「ChatGPT」が 2022 年 11 月に登場して以来、「多くの仕事なくなる」「学校教育が変わる」「教師が要らなくなる」「生徒が考えなくなる」「人間が AI に取って代わられるシンギュラリティーがやって来る」など、世界中が大混乱になっている。それに伴い、文科省や教育委員会、各大学が AI に対する基本的な考え方や使用上の留意点に関する通知文を発出した。しかし、各界の不安をよそに、その後も「Bing」「Bard」「Gamma」「Tome」の他、画像や音楽を自動生成する AI 等、AI は日進月歩で進化を続けている。もはや、拒否反応を示している状態ではない。まさに「AI 津波」がすぐそこまでやって来ているのである。

そこで、本研究では、実際に AI を授業で活用してみ、その有効性や使用上の留意点などを明らかにすることにした。

1 研究主題設定理由

筆者は、これまでに、

① 2020 年 3 月 洗足学園音楽大学

「大学におけるアクティブ・ラーニングの実践研究－授業実践を通じた成果と課題－」

② 2021 年 3 月 法政大学

「オンライン授業のよさを生かしたアクティブ・ラーニングの実践研究－zoom によるグループワークを通して－」

③ 2023 年 3 月 法政大学

「教職科目『特別活動論』におけるアクティブ・ラーニングの実践研究－演習を通して－」という流れで、大学におけるアクティブ・ラーニングについて研究してきた。そこで、この流れを受けて、今回は標記の通り、AI を活用したアクティブ・ラーニングについて研究することとした。言うまでもなく、「アクティブ・ラーニング」と文科省が言う「主体的・対話的で深い学び」は同意語なので、本研究の成果は大学だけでなく、高校以下の校種においても生きるのではないかと考える。

2 研究目的, 研究仮説, 研究方法

(1) 研究目的

本研究の目的は、AI を活用したアクティブ・ラーニングの授業を行い、AI を活用するよさと課題を明らかにすることである。

(2) 研究仮説

本研究は、授業実践を通して次の仮説を検証する。

【研究仮説】

AI を活用することで、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）がより一層充実したものになるであろう。

AI を授業に活用することで、授業に対する学生の関心を高めるだけでなく、アクティブ・ラーニングをより一層促進することができると期待される。併せて、実践を通して、AI を活用する上での留意点を明らかにする。

(3) 研究方法

① AI に関する基礎研究

世の中に出回っている AI について YouTube 等で研究し、AI に関する基礎的な知識を得る。

② AI に関する通知文の分析

テキストマイニングという AI を用いて各種通知文を分析し、AI を授業等に活用することについて文科省や教育委員会、大学はどのように考えているのかを明らかにする。

③ 授業研究

実際に AI を使った授業を行ってみて、AI のよさと課題を明らかにする。

3 研究内容

(1) AI に関する基礎研究

Open AI 社が開発した「ChatGPT」が 2022 年 11 月に発表されて以来、次々と AI が世に出て来た。その活用法は様々であるが、学校教育への活用という視点から AI を分類してみた。

① 質問（「プロンプト」という）に対して応える AI 学生や生徒が質問や指示を投げかけると、それに対する回答や操作を行う AI である。「ChatGPT」「Bing」「Bard」などが有名である。1 回の質問で終わるのではなく、出された回答に対して「小学 3 年生にも分かるように説明して」「表にまとめて」「100 文字程度で要約して」「英語に翻訳して」「〇〇言語でプログラムを書いて」等、追加質問や追加指示が可能である。授業で活用する場合は、調べ学習の場面などで有効と考えられる。基本的には、音声入力も含めた文字データによるやりとりになるが、最近ではアドインをインストールすれば、数式処理やグラフ作成など高度な対応ができるようになった。質問の仕方によって回答の精度が変わったり、同じ質問をしても異なる回答が提示されたりすることがある。したがって、1 問 1 答ではなく、複数回のやりとりが必要であり、異なる AI に同じ質問を与え、回答を比較するなどして、回答の精度を高める工夫が重要である。「Bard」は、1 つの質問に対して常に 3 つの回答を出してくるので比較しやすい。また、複数の AI を同時に動作させるアドインである「Chat Hub」を用いれば、異なる AI に同時に同じ質問を与え、回答を比較することができる。ともすれば、生徒は一つの回答を鵜呑みにしがちであり、上記の手間を省いてしまう傾向が見られるので配慮が必要である。

② プロンプト不要の AI

「CAMEL」「AutoGPT」「BabyAGI」「AgentGPT」などがこれに当たる。検討する目標（ゴール）を与えるだけで、AI が勝手に対応策等を深掘りしていく。人間は、画面を通じてその過程を見ているだけで済む。例えば、「CAMEL」で、「H 大学に合格する」という目標を与え、登場する 2 人の AI を「Teacher」と「Student」に設定してスタートさせれば、この 2 人が勝手に「入学したい学部はどこか」「その学部の受験科目は何か」「一般受験以外で合格する方法はないか」「自分の苦手科目は何か」「苦手科目を克服するための勉強計画」・・・などと、勝手にやりとりを続けていく。無料バージョンでは途中で強制終了させられるが、有料バージョンでは、ストップキーを押さない限り、このやりとりが永遠に続く。ただ、入力する文章は日本語でもよいが、残念なことに回答や画面表示が全て英語なので極めて使いにくい。日本語表示が可能な AI が出るのを期待したい。

③ プレゼン用スライドを自動的に作成する AI

「Gamma」「Tome」が有名である。プレゼンのテーマを与えて生成ボタンを押すと、各スライドの項目が

自動的に作成される。例えば、「中学校における特別活動」というテーマを与えて生成ボタンを押すと、「特別活動とは」「特別活動の歴史」「学習指導要領における特別活動の位置付け」「特別活動の実践事例」「特別活動実施上の留意点」など、スライドの項目が自動的に作られる。表現や内容を修正したければこの段階で修正可能で、項目の追加や削除もできる。スライドの項目が確定したら、スライドを生成するボタンを押せば、項目に即したスライドが次々に作られる。その際、スライドのレイアウトや文章はもちろん、関連する写真や図などが自動的に決められていく。スライドが完成した段階でも、文章や写真が気に入らなければ修正や差し替えが可能である。その際、写真等の著作権侵害が気になる点であるが、写真の候補を表示させるときに「著作権無視」「著作権フリー」「商業利用可」の選択肢によって、制限に即した写真が表示される。

④ 画像を自動生成する AI

「Stable Defusion」「Leonardo AI」「Adobe Firefly」「Bing Image Creator」「Midjourney」「BRAV5」「Canva」「Chillout Mix」などが有名である。この AI に英語で条件を入力すれば、AI が写真や画像、動画などを自動的に作成してくれる。AI の種類の中では、この分野が一番進化していると言われている。しかし、筆者がこの種の AI に対して十分な知見をもっていないため、授業での活用にはまだ時間がかかる。

⑤ 音楽や音声を自動作成する AI

これも画像生成 AI と同じく、指示に従って自動的に音楽を作詞・作曲する AI である。「Soundraw」「MusicLM」「Mubert Text to Music」「SongR」「Premiere Pro」などが有名である。この種の AI も現時点では授業への活用が思い付かないため、本研究では扱わない。

いずれにしても、AI の回答や文章、作成した画像や音楽に対して、人間が作ったものか AI が作ったものかの判定は極めて難しく、生徒が AI を用いて宿題やレポートを解決した場合の問題点となる。このことは、どの通知文にも心配な点として明記されている。「その文章や画像などが AI によるものか人間によるものかの判定を AI に行わせる」という試みがあるようだが、実用化にはまだ時間がかかりそうである。

(2) AI に関する各種通知文の研究

本研究では、AI に関する 2 種類の通知文について分析を行った。一つ目は、小中高校長への通知文、もう一つは、大学における活用に関する通知文である。そして、本研究では、それぞれ文科省の通知文と東京

都教育委員会（以下、都教委と書く）、法政大学の通知文と比較しながら分析した。分析手法は、「AI テキストマイニング」というAIを用いて2文書を比較した。

※ 巻末の資料には大学関係の通知文の分析結果のみを掲載する。

① 小中高校長への通知文の比較

（添付資料なし）

○ 単語分類

「AI テキストマイニング」で分析した結果、文科省と都教委に共通して多く出現している単語は、「AI」「使う」「考える」「踏まえる」「教育」「含む」「活動」「作る」などである。共通して出て来るといっても、例えば、「考える」を原文で確認してみると、文科省では「これからの時代に必要となる資質能力をどう考えるか」、都教委では「児童・生徒が自ら考える力を育成することが重要」と主語は異なっている。また、文科省では「情報」「学習」「判断」など学習指導要領に関連した単語が多いのに対し、都教委では「できる」「求める」「可能性」「課題」「留意」など、AIを活用する場面での単語が多い。

○ 特徴的な単語

文科省では「近い」「学ぶ」「力」が多く、都教委では「書く」「近い」「深い」「正しい」が多い。ここでも、都教委の方が、よりAIを活用する場面での単語が多いことが分かる。

○ ポジティブ・ネガティブな単語

文科省、都教委ともネガティブな単語が多く、AIの取扱いについて警戒心や不安を抱いていることが分かる。

② 法政大学 & 武蔵野大学と文科省通知文の比較

○ 単語分類（資料1）

文科省には「望ましい」「踏まえる」「広い」「取りまとめる」「図る」「進める」など、小中学校長への通知文に比べてAIを利活用していこうという姿勢が見られる。一方、法政大学と武蔵野大学では「新しい」「くださる」「乏しい」「厳しい」「強い」「課題」など、より積極的に利活用する上での注意や課題を示している。

○ 特徴的な単語（資料2）

文科省では「望ましい」「踏まえる」「広い」「考える」「行う」が多く、法政大学と武蔵野大学では「新しい」「くださる」「難しい」「厳しい」などが多く、この資料でも大学の方が実際に利活用する上での注意や課題を示している。

○ ポジティブ・ネガティブな単語（資料3）

小中高校長宛と同様、両者ともにネガティブ気味な

単語が多く、積極的に利活用させつつもレポートの評価など、使用上の留意点を明確にする重要性が現れている。

（3）授業研究

○ 教職科目における授業研究

本研究においては、AIを次の2つの方法で活用した。

【春学期】

① グループ協議でメンバーの一人として活用

【秋学期】

② 調べ学習及びプレゼン資料作成において活用

ア 実施科目及び受講生人数

| | |
|------------------|------|
| 上記①：「数学科教育法(1)」 | 19名 |
| 「特別活動論」 | 51名 |
| 上記②：「生徒指導・進路指導論」 | 48名 |
| 「数学科教育法(2)」 | 25名 |
| 「教職実践演習」 | 24名 |
| 計 | 167名 |

イ 授業内容の工夫

上記①では、「授業にAIを活用することは可能か？可能なら、実施上の留意点は何か？」というテーマでグループ協議を行い、その際にAIをグループのメンバーの一人として扱う。

上記②では、40分間で「いじめ」「不登校」「児童虐待」「LGBTQ」「GIGA スクール構想」「STEAM教育」「令和の日本型学校教育」「教員の働き方改革」「観点別評価」のうちの1テーマについて班で調べ、スライドを作成して5分間のプレゼンを行う。調べる段階とスライドを作成する段階でAIを活用する。

ウ 授業方法の工夫

上記①では、グループで意見交換をする中で「ChatGPT」「Bing」「Bard」のいずれかの回答を参考にしながら議論を進める。

上記②では、スライド自動作成AI「Gamma」を用いて、プレゼンデータを作成する。その際、必要に応じて「ChatGPT」「Bing」「Bard」を用いてスライドの内容を補充する。

授業は、PC持参の対面授業とした。100分間という授業時間の関係で、8班構成となる40名を超える授業ではzoomのブレイクアウトルームを用いて4班ごとの2会場同時に発表会を行う。それ故、ハウリング防止のため当日はイヤホンも持参させる。

4 授業研究による研究仮説の検証

(1) 授業の状況

① グループ協議での AI 活用

「数学科教育法(1)」の授業では、「AIを数学の授業に活用することは可能か?可能なら、使用上の留意点は何か?」というテーマについて、また「特別活動論」の授業では、「AIを特別活動に活用することは可能か?可能なら、使用上の留意点は何か?」というテーマについてグループで協議する際、AIもメンバーの一人に入れて話し合わせた。AIは、「ChatGPT」「Bing」「Bard」のうちから好きなものを選ばせた。その結果、どの班も「活用可能」と考え、使用上の留意点についての意見交換が中心となった。話し合いながら、提出課題にWordで記入させた。

② 調べ学習及びプレゼンデータ作成作業

いずれの授業においても学生がAIに関する知見をもっていなかったため、AIに関する説明動画(約15分間)を見せてから調べ学習の作業に入った。そのため調べ学習及びプレゼンデータ作成の時間が40分間しか取れなかったが、どの班も時間不足にはならなかった。それは受講者が理系の学生であり、PCやICT機器に慣れていたことと、まず「Gamma」でスライドのアウトラインを作成し、不十分な部分を「ChatGPT」などのAIで補充するよう工夫したからと考えられる。一般的には、40分間では短いであろう。そこで、AIの説明動画を事前に配布し、授業当日までにAIについて学習し、サインインなどの準備をさせておくことが望ましいと分かった。しかし実際は、学生の作業は極めて円滑に進んだ。それは、学生間の会話は直接対面で行い、ファイルのやりとりはzoomのブレイクアウトルーム内のChat機能を用いたからである。今回の提出課題は、紙ではなくWordデータに入力するようにしたが、それにより学生がPC画面の中でプレゼンデータを作りながら課題にも記入できたことによると思われる。

③ 発表会

発表会は、1会場の場合は全体で行ったが、受講生人数の関係から2会場同時に行う場合は、ハウリング防止のために全員がイヤホンを使って行った。このことにより、座席を移動することなく円滑に発表することができた。また、他会場の音声が発表の邪魔をすることもなかった。イヤホン持参は、対面授業においてzoomを利用した同時発表会には不可欠であると分かった。また、他班の発表を聞きながら課題(Wordデータ)に記入する方法も円滑さに寄与した。なお、各班

が作成したプレゼンデータは、授業後に受講生全員に配布し、共有した。

※ 学生が授業で作成したプレゼン用スライドの抜粋を【資料6】【資料7】として巻末に掲載しておく

(2) 提出課題の感想欄から見た検証

※ 巻末の資料掲載は、秋学期授業のみ。

【春学期】

春学期・秋学期とも全講座の提出課題に「授業の感想・質問」欄を設けてあるので、そこに書かれた内容からAIに対する学生の反応を分析した。分析方法は、AIテキストマイニングを用いた。

○ ワードクラウド

ワードクラウドとは、提出課題にある感想・質問欄に書かれた単語の出現頻度を分析し、頻度の高さを文字の大きさと表したものである。これによれば、「思う」「できる」「感じる」「使う」「授業」「活用」「考える」「必要」「利用」「分かりやすい」「面白い」「良い」といった肯定的な単語が多いことが分かる。この授業ではAIについて学生がよく知らなかったため、初めてAIを使った感動がよく現れている。

○ 共起キーワード

共起キーワードとは、ワードクラウドで現れた単語について出現パターンの似たものを線で結んだ図であり、出現頻度は円の大きさと表されている。つまり、ワードクラウドで表示された単語間の関連性を図にしたものである。共起キーワードによれば、「生徒が考える際にAIを用いることは可能である」「近い将来便利な環境になる」「生徒が学ぶ上で教師がわかりやすい環境を与えることができる」「生徒が学ぶ上で、新しく面白く良い環境・機会となる」という肯定的な意見が多い反面、「間違える可能性が怖い」「AIに頼ってしまう」「メリットは多いが課題も多い」という懸念も見られた。

【秋学期】

○ ワードクラウド(資料4)

資料4によれば、春学期同様、「思う」「感じる」「できる」「使う」「授業」「活用」「考える」といった肯定的な単語が多いことが分かる。つまり、今回初めてスライド作成AIを体験した学生にとって、AIを授業で活用することに対して希望をもてたと考えられる。

○ 共起キーワード(資料5)

資料5によれば、資料4で表示された大きな文字の単語は、互いに強い関連性をもっていることが分かる。「AIの便利さや有用性を感じた」「生徒が授業中に考える上で活用できる」「プレゼン資料を作成する上で便利」「ChatGPT」や「Gamma」を使ってスライドが

作れることに驚いた」「教員にとってもいいツールである」「班でまとめるのに分かりやすい」「使いやすいアプリである」など肯定的な内容が読み取れる。これらは、主にスライド作成 AI である「Gamma」に対する感想である。これらの授業は、9月末から10月にかけて実施したため、多くの学生が既に「ChatGPT」などを使っており、プロンプト（質問）のやり取りによって AI を活用する上での留意点については承知していた。

最後に、授業に関する感想の原文から幾つか象徴的なものを挙げておく。（原文のまま抜粋）

【春学期】

- AI が発達することで自分たちにメリットがある反面、使い方を間違えると SF 映画のように人工知能に人間が支配されてしまうという可能性があるのが怖いと思った。教育に AI を導入するためには程度のルールや情報リテラシーについても指導しないといけないと思う。
- 実際に使ってみると与えた質問に対し簡潔にわかりやすく、時に具体例を交えて解答してくれるので教師の説明より分かりやすいということも十分あり得ると思った。しかし、留意点も多数あり、AI を活用して生徒に考えさせる（生徒が考えられる）ような刺激を与える授業をするためには教師の役割を再考する必要があること、生徒間の交流を通して多様な考えを知る、自分の考えを表現するという学校だからできることもより大切になっていくことが考えられた。
- 気軽に質問しやすいという点ではいいツールだと思った。これを何歳くらいから使い始めるのが難しい問題だと思った。
- 生徒に AI を自由に使えるような環境にしまうと、計算や考える過程などを全部 AI に行わせてしまい、考える力が育たなくなるので、ある程度は教育目的での利用は制限すべきだと思った。

【秋学期】

- GAMMA が生成した発表スライドの質がかなり高く驚いた。
- Gamma を初めて利用したが、とても便利だと感じた。ただ、英語を直訳しただけのものや信憑性に欠けるものも多いので、教育という分野においては慎重に使用する必要があると思った。
- 苦労して作っていた資料がボタン一つでこうも簡単に作れてしまうことに驚いた。しかし、抽象的な内容が多い上に、自分で資料作成を行って

いないことから資料の読み込みが必要であるなど感じた。実際、今日の授業で話すときに事前に資料の内容を把握できていなかったため、文章構成がうまく作れていないままの発表となってしまうと、いい発表ができなかった。

- 40分という決められた時間で役割分担をしながらうまくスライド作成及び発表をすることが出来ました。スライド作成 AI を初めて使ったが、想像の数倍も精度が高く、凄さとともに恐ろしさを感じました。

(3) 研究仮説の検証

上記の結果から、授業実践を通して次の通り研究仮説が検証された。

| |
|--|
| AI を活用することで、アクティブ・ラーニングがより一層充実したものになる。 |
|--|

ただし、次の点が実施上の留意点として明らかになった。

- AI が数秒で回答を出してしまうため、生徒が自身で考えることをしなくなる恐れがある。
- AI は人間と同じで常に正しいとは限らないはずなのに、生徒は AI が出した回答を鵜呑みにしがちである。
- 教師にとっては、生徒が考えたことなのか AI が出力した回答なのかを判断できない。つまり、評価の仕方が難しい。
- AI を用いてプレゼン資料を作成すると、その内容が発表者自身のものになっておらず、うわべだけの発表になってしまう恐れがある。
- AI は知識を与えてくれるが、ものの見方・考え方は教えてくれない。
- これまでは自分で考えて問題を解く力の育成が求められてきたが、これからは AI の出した回答が正しいのかどうかを判断する力 (critical thinking) の育成がより一層求められる。
- 授業で活用する場合は、AI に関する説明動画などを事前に配布して視聴させておくなどして、時間短縮を図ることが重要である。
- 全員が PC を持参しているので、提出課題も PC で入力する方式の方が効率的である。

5 研究のまとめ

(1) 研究成果と今後の課題

① AI について

「ChatGPT」が発表されて以後、AI の進化は目を見張るものがあるが、回答の精度、検索根拠の明確化、

日本語対応、著作権問題など、活用する上で機能的な課題がある。そして、特に課題として大きいのは、AIに対する教員の意識改革、授業でどのように活用できるかという実践例の不足、活用上の留意点の明確化、生徒一人1台端末環境整備など、AIを受け入れる側の体制である。

② 授業について

AIを活用すれば、学生や生徒の授業に対する意欲高揚が図られるだけでなく、調べ学習やグループ協議などのアクティブ・ラーニングの充実が期待できる。一方、大学での100分授業ならともかく、小中高校での45分～50分授業でのAI活用に当たって、どのように効率的かつ効果的に行うかの検討が今後速やかに必要になる。併せて、zoomやプレゼンなどのICT環境と対面授業をうまく融合した授業設計も重要な課題である。

6 引用文献・参考文献等

(1) 引用文献・参考文献 (YouTube 等)

- 生成AIを活用する上での基本的な考え方 (文科省) Bing 動画
- ChatGPTとBardとは? 使い方 (日本語) 2023年版【音速パソコン教室】 Bing 動画
- (296) 話題の対話型AI「ChatGPT」登録と使い方! 実際に使いながら10分程度でカンタン解説 - YouTube
- 「ChatGPT」に対抗するGoogle社の対話型AI「Bard」がついに日本語対応! 巻き返しのチャンス到来, 未体験の対話体験へ! (INAWAKU TV) Bing 動画
- 【どっちが使える?】テキスト生成AI『Google Bard』は〇〇がすごい! 『ChatGPT』と徹底比較! (mikimiki web スクール) Bing 動画
- (296) 【凄すぎ!】このAIサイトが凄すぎる! 【絶対使え!】 - YouTube
- CAMEL.aiの使い方: AIとAIが勝手に会話して課題解決の提案をしてくれる | シニアから親しむWeb3.0 (tinto-eco.com)
- AIエージェント「Camel」 | AutoGPTとの違いや導入方法を徹底解説! | WEEL
- AI搭載の神ツール「Gamma」の使い方と特徴を徹底解説! ドキュメントが自動でプレゼン資料に | SELECK [セレック]
- 【完全網羅】Tome (トーム) AIの使い方を解説! Stable Diffusionで画像生成もできる! (ai-writing.tech)

(2) 使用アプリ・サイト等

① AI

- ChatGPT (Open AI 社)
ChatGPT (openai.com)
- Bing (Microsoft 社)
Microsoft Edge 内蔵 (その後 Copilot と改名)
- Bard (Google 社)
Bard (google.com)
- Gamma (Gamma AI, Inc.)
Gamma
- ユーザーローカルテキストマイニング
<https://textmining.userlocal.jp/>

② ビデオ会議システム

- zoom Ver.5.16.6 (24712) (zoom 社)

③ 文書作成 (ワードプロセッサ)

- Microsoft Word (Microsoft 社)

④ ブラウザ

- Microsoft Edge (Microsoft 社)

⑤ 学習支援システム

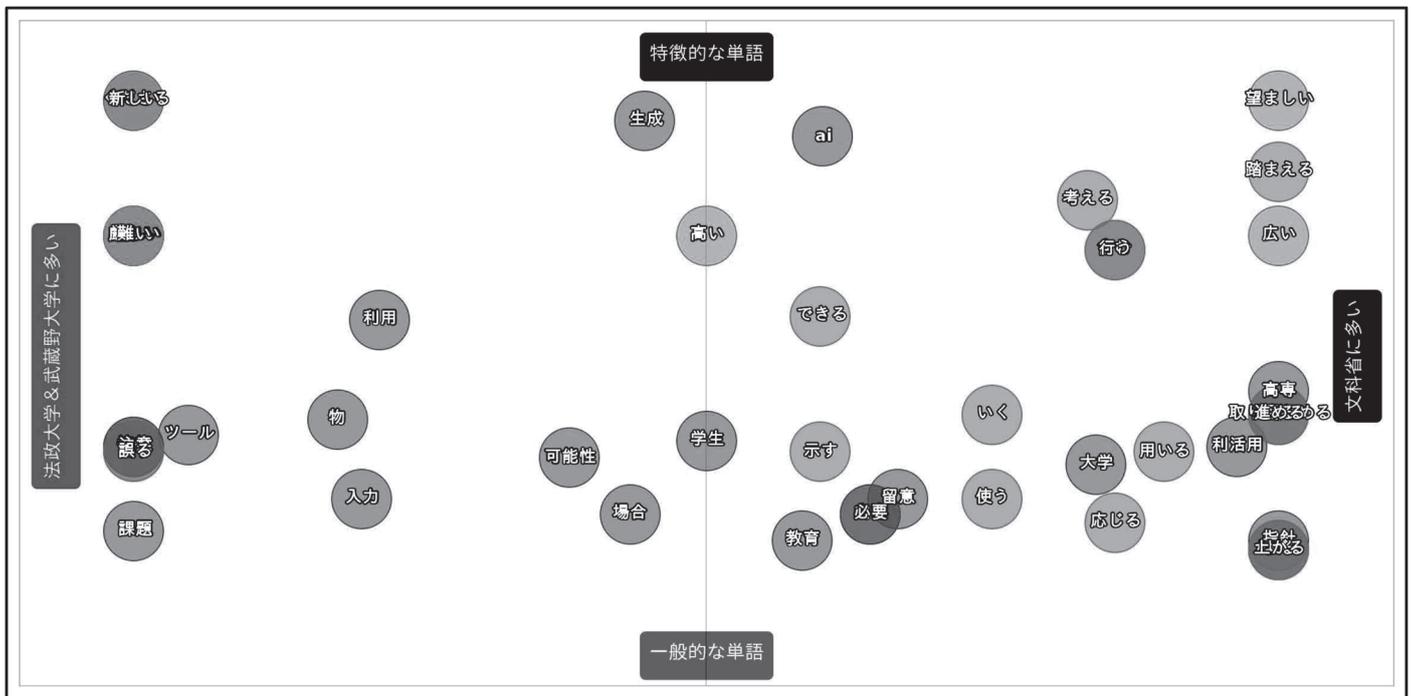
- Hoppii (法政大学)
- Muscat (武蔵野大学)



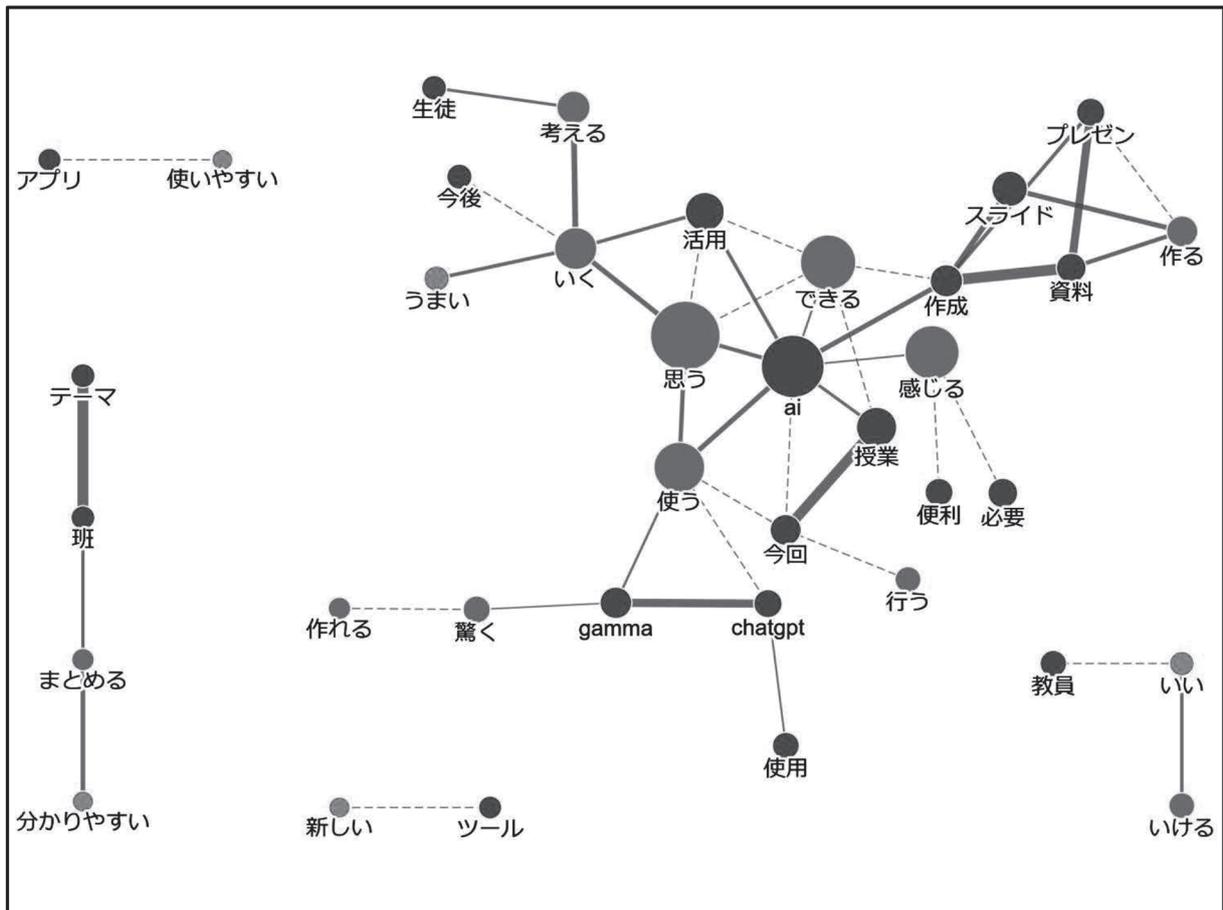
【資料1】単語分類（法政大学&武蔵野大学 vs 文科省）

| 単語分類 | | | | |
|--|--------------------------------------|--|--|---|
| 2つの文書に出現する単語を、それぞれどちらの文書に偏って出現しているかでグループ分けし、表にしています。グループ中の単語は出現頻度が多い順に並ぶ傾向があります。 | | | | |
| 法政大学&武蔵野大学にだけ出現 | 法政大学&武蔵野大学によく出る | 両方によく出る | 文科省によく出る | 文科省にだけ出現 |
| 新しい くださる 乏しい 厳しい 強い 難しい 情報 注意 出す 誤る 課題 促す 求める 該当 制限 意匠 いたす しまう それら 問題 登録商標 設定 | 利用 物 ツール 入力 行為 侵害 授業 事項 データ 使用 | 生成 ai 高い できる 学生 示す 可能性 内容 必要 場合 教育 知る 評価 努める 生じる 避ける 既存 著作物 レポート 活用 個人情報 | 考える 含む 行う いく 利活用 用いる 大学 使う 留意 応じる 対応 出力 文章 重要 まとめる 学修 | 望ましい 踏まえる 広い 高専 取りまとめる 図る 進める 指針 おる かかる よる 上がる 係る 反す 取り扱う 取る 向ける 含める 変える 定める 属する 当たる 得る 気付く 深める 満たす 生まれる 立つ 続く 繋がる |

【資料2】特徴的な単語（法政大学&武蔵野大学 vs 文科省）



【資料5】 秋学期 授業感想 共起キーワード



【資料6】 学生作成プレゼンデータ① (抜粋)

不登校とは

不登校は、子供や若者が学校に通わない状況を指します。一部の主な理由には、学校への不安やいじめ、家庭の事情、身体的または精神的な問題があります。この問題は、本人にとって深刻な影響を及ぼすことがあり、早期の対応が求められます。

Made with Gamma



児童虐待の背景

1 家庭内のストレス

経済的な問題や家族内の葛藤が原因となり、児童虐待が生じることがあります。

2 育児スキルの不足

育児スキルの不足は、親や保護者が適切な育児方法を理解せず、ストレスを解消するために暴力を使うことにつながる可能性があります。

3 依存症

親や保護者のアルコール、薬物、ギャンブルなどの依存症は、家庭内の不安定さを増加させ、児童虐待のリスクを高めることがあります。